

変わっていく久能のカタチ：  
久能小学校と久能小学校の未来を考える会をもとに

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学分野 公開日: 2024-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 光 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/0002000598">http://hdl.handle.net/10297/0002000598</a>

# 変わっていく久能のカタチ

～久能小学校と久能小学校の未来を考える会をもとに～

伊藤光

- 1 はじめに
- 2 久能小の歴史
  - 2.1 昭和の久能小
  - 2.2 平成の久能小
  - 2.3 現在の久能小
- 3 現在の久能
  - 3.1 働く世代の外部流出
  - 3.2 顔を合わせる機会の減少
  - 3.3 久能での苦勞
- 4 「久能小学校の未来を考える会」について
  - 4.1 未来を考える会の概要
  - 4.2 未来を考える会の会議
- 5 会員の久能小に対する思い
  - 5.1 石橋さんの思い
  - 5.2 原田さんの思い
- 6 考察
  - 6.1 常会の廃止について
  - 6.2 人口の外部流出について
  - 6.3 久能に関わる仕事の継承について
  - 6.4 久能の住民の思い
  - 6.5 未来を考える会の意義
- 7 おわりに

## 1 はじめに

本章では、静岡市立久能小学校（以下、久能小とする）が在校生の減少による存続の危機という大きな問題を抱えていること、そしてそれに立ち向かう「久能小学校の未来を考える

会」(以下、未来を考える会とする)の存在意義、会員の久能小に対する思いを記述する。また、それらを通し、これから久能小と未来を考える会がどのような道を歩むのかについて考察する。

私が久能小と未来を考える会を調査の対象として選んだ理由は、私の母校も、在校生減少による他校との合併の案が出ており、久能小の存続が他人事ではないように感じられたからである。ただ、私の母校と決定的に違う点は、久能小は未来を考える会という小学校の統廃合に関する議論をする集まりがあることである。私は、人口減少による学校の統廃合という、時代の波に流されるがままでは終わらないという、会員の強い思いを感じた。そして、調査を進める中で、会員が、久能小、久能全体への様々な意見を持っていることがわかった。

本章では、調査を通して聞くことができた、会員の久能小への思い、未来を考える会の今後について記述する。

## 2 久能小の歴史

本論に入る前に、久能小の歴史について整理したい。聞き取り調査を行った方々の年代から、昭和に卒業した方と、平成に卒業した方の2つに分け、それぞれの世代で全校生徒数、学校行事、などを書いていく。

### 2.1 昭和の久能小

ここでは、未来を考える会の会員の鈴木和則さん(男性、65歳、西平松在住)、石橋美津子さん(女性、58歳、根古屋在住)の語りと、久能小創立100周年を記念して作られた『久能』をもとに、昭和の久能小についてまとめる。鈴木さんは1964(昭和39)年から1970(昭和45)年まで久能小に在学していた。当時、全校生徒は300人以上おり、クラスは各学年2クラスあった。鈴木さんが小学4年生の頃に、サッカー少年団ができ、クラスのほとんどの男子が入っていたそうだ。平日は学校の授業が終わったら真っ暗になるまで練習し、土日は毎週バスに乗って試合へ行っていた。『久能』によると、サッカー少年団ができた翌年以降、久能山と正宮旗争奪サッカー大会が毎年開催されるようになったそうだ。石橋さんは、1971年から1977年まで久能小に在学していた。当時、1学年は40人ほどで、全部で7クラスあった。鈴木さんが在学していた年代から7年ほど後であるが、その間に全校生徒は約100人減少している。小学3年生の頃に鼓笛隊、小学5年生の頃にミニバスケットボールのクラブ活動ができた。『久能』には、1986(昭和61)年以降、毎年ストロベリーマッチを開催していたと書かれている。鼓笛隊には、クラスの女子全員が参加していた。学校生活では、地区ごとに集団登校があり、1年生でも6年生の子と関わりがあった。学校行事では、1年生から6年生までの各学級で学年を超えた縦割り班でログハウス作り、海岸

での砂の造形などがあった。

## 2.2 平成の久能小

次に、平成を久能小学校で過ごした世代の話を、A氏（30歳、掛川市在住）の話をもとにまとめる。A氏は1999年から2005年まで久能小に在学していた。卒業当時のクラスメイトは18人、全校生徒数は92人であり、全校生徒の顔と名前が一致していた。

当時の小学校の行事で思い出に残っているもので、長縄と、久能を誇る日などを挙げていた。長縄は、6年生のときに特に力を入れており、2月の大会まで、優勝に向けて毎日練習をしていた。優勝したら焼き肉を奢ってもらうという約束を先生とし、大会では本当に優勝したという。久能を誇る日は、年に4回ほど行われていた行事であった。久能を誇る日では、地域の人に演劇を披露したり、地域の人から昔の遊びを教えてもらったり、砂浜で制作をしたりしたそう。

学校外の活動では鼓笛隊はクラスの女子全員、ミニバスには、クラスの女子8人中5人が入っていた。そのほかに、青沢に習字教室、古宿にピアノ教室や、久能太鼓もあった。ピアノ教室は、久能小に在学していた子の母親がしていた。A氏は習字教室、久能太鼓に通っていたそう。

## 2.3 現在の久能小

ここでは、現在の久能小について、渥美鑑司教頭、荒川民久校長、学校評議員を務める石橋さんをもとにまとめる。『久能』によると、久能小の生徒数は1944（昭和17）年の736人をピークに減少を続け、現在の全校生徒数は22人となっている。

表1 現在の久能小の生徒数と今後の予測

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
令和4年	0	6	4	2	7	8	27
令和5年	3	0	6	4	2	7	22
令和6年	2	3	0	6	4	2	17
令和7年	3	2	3	0	6	4	18
令和8年	1	3	2	3	0	6	15
令和9年	1	1	3	2	3	0	10
令和10年	2	1	1	3	2	3	12

出典：久能小学校の未来を考える会資料（令和4年）をもとに作成

上の表は、令和4年時点での全校生徒数と、令和10年までの生徒数推移の予測である。渥美教頭によれば、複式学級となっている学年については、生徒1人ひとりが手厚い教育を受けられるなどのメリットがあり、生徒数が少ないことは、必ずしも悲観的なことばかり

ではないという。教育の面では、生徒の表現力を育てるために、朝の時間に Google chrome を用いてスピーチを行う取り組みがある。スピーチが終わったら、聞いていた生徒から意見をもらう時間があり、大半の生徒が親身に意見をくれるという。また、石橋さんは、災害対策の手厚さを評価している。久能小には、生徒 1 人に対しての非常食の備蓄が豊富で非常用の衣服も用意されており、それらを入れておく大きめの非常用のボックスのようなものまで用意されている。これは生徒数の少ない久能小だからこそ実現できるサポートである。

### 3 現在の久能

ここでは、現在の久能についてインタビューの内容をもとに考察する。現在の久能には、久能小の在校生を見てもわかるように、人口減少が激しい。このことについて、インタビューのなかで、いくつかの要因が関係しているように思われた。以下では、石橋さん、B 氏（33 歳、女性、西平松在住）、へのインタビューをもとに、久能の人口減少について記す。

#### 3.1 人口の外部流出

石橋さんにインタビューした際、久能小の存続についての話をした。石橋さんは、久能小の生徒数が減少していることについて「未来を考える会は、取り組み始めるのが遅すぎた」と話している。また、その原因について「自分の孫が久能小に入らない限り、久能小との関わりがなくなるから、久能小の生徒数が減っていることも、身近な問題として考えられないんじゃないかな」と話していた。

また、B 氏にインタビューを行った際に、小学校時代の同級生について話を聞いた。B 氏の小学校時代の同級生は、大学進学の際に、県外に出て行った人が多くいたそうだ。それらの人たちは、就職を機に静岡市に戻ってくる人もいるが、久能ではなく、静岡市の市街地に近い地域に住む人が多いと言っていた。B 氏の約 20 年前に久能小を卒業した B 氏の卒業当時のクラスメイトのうち、久能に戻って住んでいる人は 10 人ほどであると言っていた。

未来を考える会会長の長島源策さん（男性、70 歳、西平松在住）は、現在長島さんの身内が久能小に通っていることが、久能小について考えるきっかけの一つになっていると語っていた。

3 名のインタビューから、平成に久能を卒業した人が久能の外で暮らすようになったこと、久能に住む人が久能の人口減少、久能小の在校生減少について鈍感になっていることがわかる。

石橋さん、B 氏、長島さんへのインタビュー内容から、久能小の生徒数減少という問題への関心の薄れと、久能の人口の外部流出が関係していることが推測できる。昭和世代に久能小を卒業した人たちの子、孫の代の人たちが、就職、進学を機に久能の外で働き、暮らす。

同時に、本人たちは久能小を卒業して以降、久能小と関わるものがなくなる。その結果、久能に暮らす高齢の人たちは、久能小へ関心が薄れていってしまうことになっていると考えられる。また、昨年は、久能小学校での地域の人も参加する運動会がコロナの流行で中止となった。現在の久能小の生徒と関わる機会の損失も、久能小への関心の薄れの原因の一つではないかと考えられる。

### 3.2 顔を合わせる機会の減少

久能小の卒業生である原田光浩さん（男性、53歳、中平松在住）へのインタビューのなかで、久能の隣組の制度についての話になった。原田さんによると、以前は、毎月19日にメンバーの誰かの家で常会を開いていたそうだ。常会では、連合町内会長の集まりでの情報を、隣組のメンバーに伝達したり、集金をしたりすることが主に行われていた。常会が廃止されてからは、情報の伝達は回覧板を通して、集金は個人の口座から引き落とされることとなった。また、年に1回、久能小で運動会が開かれており、地域の人も参加していた。久能小と、久能の体育委員の人が中心となって企画するものであったが、昨年はコロナ流行の影響で中止となっている。原田さんは、「常会は自分の家を綺麗にしたり、お茶とかお菓子とか出したりしなくちゃいけないと確かに面倒くさいこともあったね。でも、常会も運動会も、久能の人と顔を合わせるいい機会だった。こんな狭い地区だけど、運動会ではじめて話した人も意外といえるよ。こうやって久能の人と顔を合わせて話す機会があると、災害のときとかに役に立つと思うよ」と振り返っていた。常会を通して隣組のメンバーと仲を深め、隣組のメンバーと旅行に行ったこともあったという。

以上のことから、久能ではコロナ禍以前は、隣組単位での常会が毎月開かれていたため、人と人が定期的に顔を合わせていたことがわかる。常会は、毎月の集金、情報の共有などを行うという名目で行われていたが、近隣住民とのつながりを維持するうえで大きな役割を果たしていたということができよう。

### 3.3 久能での苦勞

久能連合町内会会長の長島源策さんへのインタビューのなかで、連合町内会長をするうえでの苦勞などを聞いた。長島さんは、連合町内会長の仕事について、「連合町内会長の仕事は大変なことが多いよ。色んな会議やパーティに顔を出さなくちゃいけないし、休みが少ない。誰もやりたがる人はいなかった。だから私が、前任の長島さんに頼まれてやることにした。久能のことが本当に好きじゃないとやっていけないと思う」と話していた。また、各地区の自治会長の仕事については、「自治会長も誰もやりたがる人はいないから、副会長、会長を1年ずつ務めて、次の年にまだやったことがない人を副会長に任命する形になっている」と述べている。

また、石橋さんは、久能の消防団について話していた。石橋さんは、消防団の仕事が、外の地域から、久能に婿入りする形でやってきた人が加入してやっていると言っていた。その

ことについて「本当は久能の人がやった方がいいと思うけど、面倒くさい仕事だから誰もやりたがらなくなっている」と話していた。また、5年ほど前まで婦人会があり、会長をしていたが、なくなってしまったという。そのことについて「婦人会は私が会長をしていたけど、人数が少なくなって会はなくなった。会がなくなってしまうと、より女性の声が久能の自治会に届かなくなってしまう。一度活動がなくなってしまうと、再会する労力がかかるから大変だし、続けていくことが大事だと思うよ」と話していた。

## 4 未来を考える会について

前節では、原田さん、長島さん、石橋さんの語りをもとに、久能が現在抱える人口減少とそれに伴う問題を記した。ここからは、このような状況の久能で発足した未来を考える会の概要、活動について記述する。

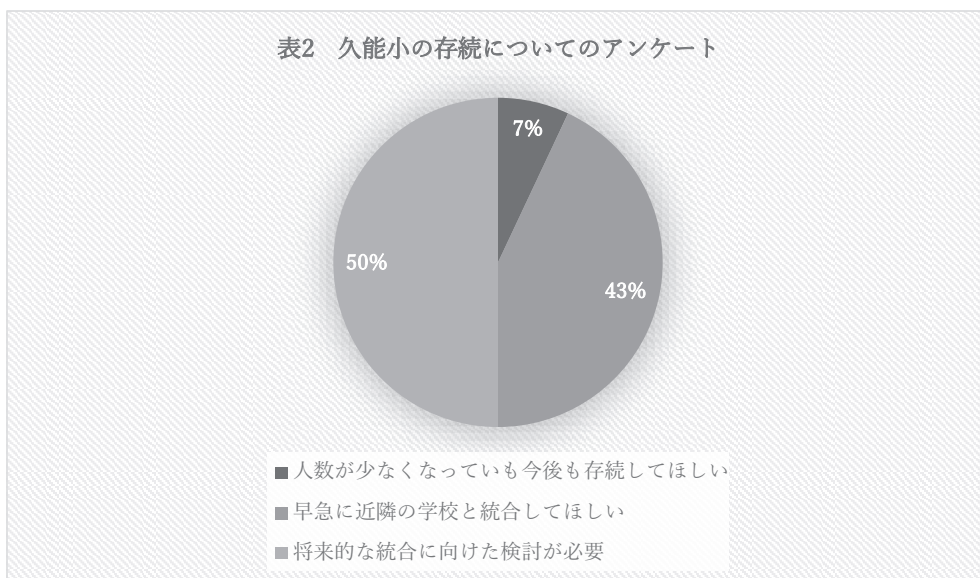
### 4.1 未来を考える会の概要

未来を考える会は、長島さんと、前任の校長の畑先生の手によって、昨年発足した。初年度の会員は、連合町内会三役、各地区の自治会長、学校評議員、PTA 会長、渥美教頭、畑校長であった。ほとんどが久能小の卒業生であり、久能小の生徒数減少に強い関心があるメンバーであった。今年度からは、各地区の自治会長、畑先生を除き、荒川校長、久能こども園の園長、竹下さんを加えたメンバーとなっている。未来を考える会の活動は、昨年、久能の全世帯を対象としたアンケートを実施したほか、定期的に会議を行い、久能小の存続についての議論をしている。

### 4.2 未来を考える会の会議

この節では、未来を考える会の会議でどのようなことが話し合われ、現在どのような段階であるかについて、2023年6月13日に開催された第3回会議の内容をもとに記す。

表2 久能小の存続についてのアンケート



出典：久能小学校の未来を考える会第3回会議資料（令和5年）をもとに作成

表2は、令和4年時点で久能小に子どもが在籍している保護者へのアンケート結果である。アンケートの結果より、久能小に生徒を持つ家庭の大半が、統合を視野に入れた意見を持っていることがわかる。

会議ではまず、上記のアンケート結果、全世帯を対象とした久能小に関するアンケートの結果を共有し、久能小の統廃合についておもに話し合われた。多くの会員からは、現在久能小に生徒を持つ家庭、久能小に進学する可能性のある子どもを持つ家庭の意見を最優先とするべきであるという意見や、アンケートの結果をもとに考えると、久能小は、静岡市立大谷小学校（以下、大谷小とする）と統合するべきであるという意見が出た。前節で述べたように久能小には、久能小でしかできない少人数教育や、久能小でしか実現できない、地域に密着した学校生活があるだろう。一方で、大谷小でないと子どもを預けられないという家庭もあるだろう。例えば、大谷小には隣接した学童があるが久能小には学童がなく、今後も校舎の構造上の問題や生徒数の面から設置できる見込みがない。親が共働きの家庭では、学童に子どもを預けることができると安心して働くことができるだろう。現に、久能に住んでいるが、学童を理由に、大谷小に子どもを通わせている家庭もいくつかある。また、少人数の学校では、集団行動を実際に体験して学ぶ機会がなく心配だ、という意見が、未来を考える会が実施したアンケート内に見られた。実際に会員の中には、自分の子が久能小を卒業し、中学に上がった際、これまででない大人数に馴染むのにすごく大変だったという人もいた。

第3回の会議では、実際に何か行動を起こすなどの結論が出た訳ではないが、未来を考える会の会員が皆、久能小のことを愛しており、真剣に久能小の行く末を考えていることが伝わり、会議中はほとんど沈黙の時間がなく、皆がこの件に関して強い思いを持っているこ



とがわかった。

## 5 会員の久能小に対する思い

本節では、今回インタビューしたなかで、特に久能に対する強い思いが感じられた、石橋さん、原田さんの語りを取り上げる。前節で述べたように、石橋さんは久能小を卒業し自分の子どもが久能小を卒業してからも、久能小の学校評議員として久能小の教育に関わり続けている数少ない人物である。また、原田さんの娘さんは、現在久能小に通っている。石橋さん、原田さんへは、久能小のこと、未来を考える会についてインタビューしたが、そのほかにも、久能全体に対する思いも聞くことができたため、ここではそれについて書く。

### 5.1 石橋さんの思い

石橋さんはインタビューのなかで、久能で、久能の人として暮らすことの難しさ、久能小を残したいという強い気持ちを語っていた。

〈事例1 石橋美津子さん（女性、58歳、根古屋在住）〉

石橋さんは、石橋さんの母の代に、久能に移り住み、旅館を経営してきた。久能に移住してきて3代が経過するが、未だに久能ではよそ者として扱われているような意識が離れないという。また、久能の人たちは、頑固な人が多いと言っていた。その一例として、石橋さんがお土産屋さんのPRを目的としたSNSの導入の件について話してくれた。根古屋地区はお土産屋さんなどの販売店が多い。石橋さんは、久能の魅力を知ってもらうために、SNSで石垣イチゴの魅力を発信する事を提案した。皆、その場では好意的な反応をしていたらしいが、実際に導入した店はわずかであった。このように石橋さんは久能全体のために色々考えて意見を出すのが、結局あまり変わらないということが何度もあったそうだ。また、野菜の無人販売所の窃盗被害を防止するために、無人販売所への監視カメラを、静岡県南警察署の署長さんと協力して導入したという。このことについて石橋さんは、「本当は無人販売所を出している、久能で農業をしている人がもっと心配しなければいけないことだと思う。自分たちのことにもっと敏感になった方がいいと思う」と口にしていました。

久能小については、「本音を言うと、久能小を残してほしい。自分たちが育ってきた所だし、久能小の良い部分をたくさん知っているから。大谷小との統合が有力視されているかも知れないけれど、できることなら久能小をこのまま残したい」と述べていた。

以上の内容からわかるのは、石橋さんは久能の人の危機感のなさを不安視していることである。それでは、同じように久能に対する強い思い入れを示している原田さんはどのよう

に久能小を見ているのだろうか？

## 5.2 原田さんの思い

原田さんは現在、娘さんが2人久能小に通っており、昨年はPTAの会長を務めた。現在進行形で久能小と深く関わりがある家庭の原田さんへのインタビューからは、統合を視野に入れた意見が出た。

〈事例2 原田光浩さん（男性、53歳、中平松在住）〉

久能小に通っている原田さんの娘さんは現在小学3年生と小学4年生で、原田さんは久能小の教育などに不満は特にないようだ。しかし少人数の学校であることの特徴が裏目に出してしまうことを心配していた。例えば、久能小は生徒全員が顔見知りで仲が良いそうだ。しかし少人数であるがゆえに、学校内で競い合って高め合うことが少なくなってしまうのではないかと原田さんは言っていた。久能小は、皆がお互いに顔見知りで仲が良かったため、個人的に不得意なことがあっても認め合える関係であるからこそ、不得意なことを克服しようとする気持ちが育ちにくいのではないかと心配していた。

また、久能小の統廃合に関しては、たとえ今後、久能小が大谷小と統合しても、子どもを久能小で学ばせたいという家庭が1つでもあったときに、久能小を選べる選択肢があることが重要なのではないかと言っていた。

以上のことから、原田さんは、久能小の少人数教育には満足しつつも、少人数の学校では実現できないことがあるのではないかとこの意見を持っていることがわかった。

## 6 考察

ここまで第2節では、久能小の歴史について、第3節では久能に潜む様々な問題点、第4節では未来を考える会について、第5節は石橋さん、原田さんの久能に対する思いを取り上げてきた。第6節では、これらを通して、久能、久能小、未来を考える会についての考察をする。

### 6.1 常会の廃止について

まず、原田さんへのインタビューで語られたことについて考察する。常会の話のような例を川上浩司は、「不利益」という言葉で説明している。川上による不利益の定義では、まず「便利であること」を「特定のタスク達成に省労力である」とことと定義している。そのうえで、不利益とは、「特定のタスク達成のための益の中で、特に『便利=省労力』だけを注視

する事によって見過ごされてしまったが実は重要であった別の益」を指すものと定義している（川上 2009：127-129）。

原田さんの話す常会を例に考えると、常会という、情報伝達と集金タスク達成のためには非効率なことであるが、直接顔を合わせることができるといふ重要な益があった。これは、回覧板、口座引き落としという省労力なシステムにおいては達成されなかったことである。

久能において、直接顔を合わせる機会が減少したことは、久能という地域で暮らす特殊性が薄れていることにつながるのではないかと考える。地域で暮らすということは、ただ単にその地域に、他人との関わりなく暮らすのではない。同じ地域に暮らす人同士のコミュニティに属し、同じ地域に暮らす人と関わりを持つことで、地域に暮らすという特殊性が生まれる。隣組は、久能に住むすべての世帯に割り振られる。よって、久能に住む人は、隣組というコミュニティに受動的な形で属することになる。常会が開かれることで、隣組のメンバーは定期的に顔を合わせることができ、隣組でのつながりが維持される。定期的に近所の人と会う機会があることで、久能に住み、同じく久能に住む人と交流して生活することができる。これが、久能でしか成せない生活の大きな要素となるのではないかと考える。

また、顔を合わせる機会が減少するという事は、話し合う機会の減少にもつながる。久能の人が久能のことを自分たちの手で変えていく可能性が少なくなっていってしまうのだ。このような流れの中で、未来を考える会は、久能の住民が自分たちの育ってきた場所の未来を自分たちの手で決める機会を作っていると言えるのではないだろうか。

## 6.2 人口の外部流出について

前項で述べたように常会が廃止され、人と人が関わる機会が減少すると同時に、久能の人口の外部流出が進んでいる。それはどのような問題を併せ持つのだろうか。

第3節の石橋さん、B氏へのインタビューによって、久能出身の人が久能の外で暮らすようになったこと、久能に住む人が、久能小の在校生減少の問題について鈍感になっていることがわかった。そして、久能小の生徒数減少という問題への関心の薄れと、久能の人口の外部流出が関係していることが推測できる。昭和に久能小を卒業した人たちの子、孫の代の人たちが、就職、進学を機に久能の外で働き、暮らす。すると本人たちは久能小を卒業して以降、久能小と関わるものがなくなる。その結果、久能に暮らす高齢の人たちは、久能小に対する関心が薄れていってしまうことになっていると考えられる。また、去年は、久能小での地域の人も参加する運動会がコロナの流行で中止となった。現在の久能小の生徒と関わる機会の損失も、久能小への関心の薄れの原因の1つではないかと考えられる。

久能の人口が外部に流出することで、久能小の存続という問題について語る地域住民が減少していることが問題と言えるだろう。

## 6.3 久能に関わる仕事の継承について

続いて、長島さん、石橋さんの口から語られた久能が抱える多くの問題について考察する。

長島さんの話から、連合会長、自治会長の仕事は、積極的にしようとする人がいない状況となっていることがわかる。これは前述した久能小への関心の薄れと同様に、久能への関心の薄れも存在することが読み取れるのではないだろうか。

石橋さんの話からは、久能という地区に関わる仕事を引き受け、継承しようとする人が少なくなっていることがわかる。消防団の仕事は、火災時の消火活動だけでなく、防災活動を行ったり、訓練・講習に参加したりするなど、多くの仕事があり、重荷であるという意見が出るのも不思議ではない。久能では消防団のような仕事が厄介事のように捉えられ、外部から久能に引っ越してきた人が、久能の人たちに認められるためにこれらの仕事を行うようになったのではないかと考えられる。久能は災害が多い地域であることから、消防団の仕事は久能の中でも重要視されるべき事柄ではないだろうか。高齢化によって仕事を担うことが体力的に厳しくなっていることも考えられるが、積極的に請け負う人が少なくなっていることを示していると見受けられた。

婦人会の話については、久能に関するコミュニティの維持が難しくなっていることの一例と考えられる。これには久能の人口が減っていることが原因の1つとして考えられるが、ほかにも、高齢化により集まりに参加する人が減ったことや、前述した、久能でのつながりが薄くなっていることなども原因として考えられる。また、石橋さんも言っていたように、一度活動をやめて団体を解体してしまうと、再度始めるにはメンバーが必要であり、継続するよりも大きな労力がかかってしまう。

#### 6.4 久能の住民の思い

第5節の石橋さん、原田さんへのインタビューから、未来を考える会の会員の中でも、久能小に対する思いは異なることがわかる。石橋さんへのインタビューの内容からは、久能の人の危機感のなさを不安視していることがわかる。久能をより良くするためにここまでハッキリと意見を言っていた人は、私がインタビューをしたなかでも石橋さんのみであった。久能小については、自分自身は久能小を残したいという思いがありながらも、最優先すべき意見は、現在久能小に生徒を持つ家庭であること、大谷小との統合が有力視されていることにもどかしさを感じられた。石橋さんは学校評議員であるため、久能小の魅力を知っているからこそ、久能小の存続を強く希望しているのだろうと考えた。6月13日の会議でも、なんとかして久能小を残す方法はないか、懸命に意見を出していたのが、私の中で印象に残っている。

原田さんへのインタビューからは、久能小の少人数教育には満足しつつも、クラスの人数が多い学校でないとできない教育があるのではないかとこの意見を持っていることがわかった。確かに、石橋さんや渥美教頭が言うように、久能小には、少人数でしかできない、しっかりとした災害対策や、教育の仕方がある。一方、原田さんが言うような、少人数教育で競争心が育ちにくいのではないかとこの懸念があるのも事実である。個人の得意、不得意を認め合えるということは素晴らしいことであるが、裏を返すと、競争心が育ちにくいと言え

るし、このことは学校教育によって改善するには限界があると考えている。原田さんが言うように、学校の規模によって特徴があるのだから、今後、久能小の教育を受けたいという家庭があったときに、いつでも久能小での教育を再開できる体制を作ることが大切であると考えた。

## 6.5 未来を考える会の意義

前述したように久能には、多くの人が頭を抱える問題が存在する。このような状況で未来を考える会ができたことには、大きな意味があると考えている。まず、久能小の生徒数の現状に対して、心配に思い、なんとかしなければならぬという思いを持った人たちが、未来を考える会があることで、その思いを言葉にすることができる。久能の住民は、久能小の生徒数が減っていることに対して、憂うだけではなく、その状況に何か行動を起こすことができる可能性が、未来を考える会を通して生まれた。これが、未来を考える会ができた最も大きな利点なのではないだろうか。前述した常会の廃止、婦人会が無くなってしまったことからわかるように、久能では話し合う機会が減少している。久能の住民自身が久能を変えていく機会を失っているなかで未来を考える会ではできたのである。未来を考える会が久能小に強い思いを持っている人たちが話し合うことができる住民組織という意味で、久能において特殊な存在であるのだ。

また、未来を考える会の会員は、それぞれの人が置かれた状況によって、異なる意見を持っている。たとえば、石橋さんは、第5節で述べたように久能小の存続を強く望んでいるし、原田さんであれば大谷小との統合を視野に入れた考えを持っている。その他の会員も十人十色の意見を持っているので、これらを1つにまとめ、結論や解決策を出すには時間も労力も大変にかかることが予測できる。また渥美教頭によると、未来を考える会は、久能小のこれからについて決定する権限は持っていないと言っていた。それでもこの会が存在することにはどのような意味があるのだろうか。

以上のことを考えるにあたり、宮崎広和の『希望という方法』を参照にしたい。宮崎によれば、知の方法としての希望は、〈既に-ある〉ものについての達成感、あるいは、〈もう-ない〉ものへ郷愁といった過去へ向いた知識を、再び未来へ、〈まだ-ない〉ものへと向かわせるという（宮崎 2009：8）。

このことを久能小と未来を考える会にあてはめて考えると、既に在校生が少なくなってしまうという現状を、未来を考える会ができたことにより、まだ久能小の行く末はわからないという未来へと転換することができたのだ。久能小の在校生減少に誰も興味を示さず、未来を考える会のような組織が作られることもなかったら、久能小の未来について考えられることはなかっただろう。しかし、未来を考える会のような組織があることで、考えられることがほとんどなかったはずの久能小の未来について関心が向けられる。このことによって、久能小という過去に向いた知識は、未来を考える会によって、再び未来へ向かうことができたのだ。渥美教頭静岡市立久能小学校編がこの会に参加するのは、この会の活動によ

って地域の人が少しでも久能小に関心を持ち、久能小について考えるきっかけになれば良いなという思いでいるからだそうだ。未来を考える会は、地域の多くの人の、久能小の知識を未来へ転換することができているという意味では、大きな役割を果たしているのではないだろうか。

## 7 おわりに

調査を始める前と、調査を終えた後では、私のなかで未来を考える会についての印象が大きく変わった。未来を考える会で答えを出すことを急ぐ人がいる一方、多種多様な意見があり、答えを出すのに時間がかかるというもどかしさを感じた。しかし、未来を考える会という存在自体が久能に与える影響を考えると、未来を考える会の存在意義は、久能小の統廃合についての答えや意見を出すことだけではないのではないかと感じた。久能小の存続という議題をより多くの地域住民に再認識させ、久能小の存続に関心のある人が意見を言う場ができたという点に、未来を考える会のできた大きな意義があると思う。

## 謝辞

今回の調査を行うにあたり、たくさんの方にご協力をいただきました。長時間のインタビューにも快く応じていただき、この報告書を完成させることができました。本当にありがとうございました。

## 参考文献

川上浩司

2009 「不便の効用に着目したシステムデザインに向けて」『ヒューマンインタフェース  
学会論文誌 Vol.11, No.1』2009 出版：127-129 頁。

静岡市立久能小学校創立 100 周年実行委員会編

1992 『久能』静岡市立久能小学校創立 100 周年実行委員会。

宮崎広和著

2009 『希望という方法』以文社。